

JASE

現代性教育 研究ジャーナル

 2014 年
No. 34

2014年1月15日(毎月15日)発行

日本性教育協会

 THE JAPANESE
ASSOCIATION
FOR SEX EDUCATION

〒112-0002 東京都文京区小石川2-3-23 春日尚学ビル Tel.03-6801-9307 Mail info_jase@faje.or.jp URL http://www.jase.faje.or.jp 発行人 鈴木 勲 編集人 本橋道昭
© JASE. 2014 All Rights Reserved. 本ホームページに掲載している文章、写真等すべてのコンテンツの無断複写・転載を禁じます。

contents

第21回世界性の健康学会報告……………	1	「ありのままのわたしを生きる」ために③④……………	9
性教育の歴史を尋ねる⑩……………	7	今月のブックガイド……………	10
北丸雄二のニューヨークレポート③④……………	8	JASEインフォメーション……………	11

■第21回 世界性の健康学会報告

自然科学、社会科学両面からの多彩な研究発表

—— 21st Congress of the World Association for Sexual Health に参加して ——

東京大学総合文化研究科特任研究員 正岡 美麻

はじめに

2013年9月21日から24日まで、ブラジルのポルトアレグレにて21st Congress of the World Association for Sexual Health (第21回世界性の健康学会)が開催された。今回、参加者そして発表者の一人として見てきた学会の様子を、ここで報告させていただきたい。

日本からみて地球の正反対に位置するブラジル。12時間程度のフライトを2回経て丸一日かけて国内主要都市に到着。そこからさらに数時間飛行機で移動してたどり着くポルトアレグレは、ブラジルの南部にある人口140万人強の都市である。当初リオデジャネイロで行う予定であった本学会は、2014年にサッカーワールドカップ、2016年にオリンピックが開催されることになった関係で会場が変更となった。実際行き帰りに経由したサンパウロやフォスドイグアスでも空港内や街のあちこちで工事が行



われており、翌年からのイベントに向けての準備が進んでいる様子が見られた。国内でも寒暖の差は大きいようだが、我々が滞在したポルトアレグレは春を迎える少し前。日中は割合暖かいものの、学会会場への行き帰りとなる朝夕はまだだいぶ肌寒い。港町であるため学会会場から5分ほどの私のホテルからは海が見え、会場と反対に5分ほど歩くと大きな昔ながらのマーケットがあつてにぎわっていた。街



には古い建物も多く、洋服、小物、靴、食料、電化製品など様々な小売店が並び人も多く行き交っている。さらに徒歩圏内には比較的新しいショッピングモールもあり、歩くたびに様々な姿がみられる街並みであった。その街並みの一角に位置するプラザ・サン・ラファエル・ホテルにて、4日間にわたる性健康学会は行われた。

充実したプログラムの参加者の熱狂

今学会はプログラムが毎日朝から晩まで密度濃く詰まっていた。これまで参加してきた性科学関連の国際学会では（そして分野を問わずそういった学会は多いと思うが）、開会式は午後から、翌日以降はスタートが10時頃、最終日は昼頃まででクロージングセレモニー、というスケジュールが多かったように思う。それぞれのプログラム設定や進行の仕方にお国柄が垣間見えたりして面白いのだが、今大会は4日間の開催期間がフルに使われている非常に真面目なプログラム構成であった。一般演題は口演が30セッション強（1セッションあたり5～7題の演題がある）、ポスターも300題近くあった。これ以外にもシンポジウムやワークショップ、基調講演、会長講演などのプログラムが用意され、時間はめいっぱい、そのため初日の開会式も朝8時半スタートであった。

早朝ながら会場には結構な人数が入り大会会長 Jaqueline Brendler の挨拶から開会式はスタートした。南アメリカでこの学会が開催されるのは実に20年ぶりのことらしい。開会式の最後には、地域のサンバグループの人たちが登場し、サンバの披露があった。スタンディングオベーションで私たちは



それを迎えたが、ブラジル国内からの参加者は立ち上がると次々にその場で踊り出し、記念撮影をしい、サンバグループのメンバーに負けず劣らず盛り上がっていた。学会側の用意したパフォーマンスを受け取るのではなく参加するという姿勢を目にし、興味深く感じたひとときであった。

さて、開会式のあとはすぐにセッションが始まる。今回に限らず World Association for Sexual Health (WAS) の大会の特徴の一つは、その発表内容の幅広さにある。アジア・オセアニア性科学会がどちらかという医学系の内容に強いものに対して、世界大会ではより社会科学分野の発表の充実が感じられる。もちろん医学・薬学や生物学的な観点からの研究もいくつも用意され、学際的な発表の場となっている。アカデミックな職に就いている人に限らず、アクティビストの発表も多く、当事者からの発信もあるため、内容は本当に多岐に渡る。限られた紙幅ではあるが、その一部をここで紹介させていただきたい。

自然科学的な研究の発表

自然科学的な発表の中には、例えば脳機能からセクシュアリティなどを解明しようとする試みの報告があった。認知・情動・動機づけといった側面から脳の活動をみると、ゲイとヘテロの人では脳細胞の活性は非常に近いということや、ペドフィリアの人は前帯状皮質の活性が下がっているという報告があった。ただしペドフィリアに関しては、別の日の発表でもIQや身長、利き手などに加えて脳との関連の調査が進んでいる旨が報告されており、こちらでは、現在までに3本の論文があるペドフィリアと



脳の研究は3本とも結果が異なっているとされていた。さらに現在までに脳の活性と欲求の関連はどちらが先に起こってどちらに影響を与えているか未だ不明であることも語られていたため、これからさらなる発展が期待される場所のようである。

ほかの自然科学分野の知見ではホルモン補充療法に関する発表も興味深かった。40代女性のテストステロン（男性ホルモンの一種）は20代のその半分まで減ってしまうことが知られている。この中高年の女性へのテストステロン補充療法について、セクシュアルアイデンティティ、セクシュアルファンクション（精神的機能と外性器の機能の両方）、セクシュアルアクティビティといった面からの過去の研究を紐解いていく。この発表では、閉経後すぐに補充療法を始めるのが望ましい、ホルモン補充療法を行わないテストステロン欠乏女性は、燃料を積んでいないフェラーリも同然だ、と強く言い切られていた。

続いての発表ではもう少し具体的な投薬の注意などが話され、基準値を超えないような投与の重要性、またサプリメントの危険性についても触れられていた。DHEA（これも男性ホルモンの一種）は一日の投与量を増やしても効果がその分上がるわけではないことや、適切な投与のために個人のプロフィールや病歴だけでなく家族の病歴などもきちんと把握する必要があること、エストラジオール（女性ホルモンの一種）の血中濃度が上昇するタイミング、こうした治療が合わない場合は代替手段としてテストステロンクリームを使うこともできること、というかなり具体的な話もあった。

同じ薬学系の発表では男性の射精障害への薬物治療についての発表もあった。その他、医学と関係す

る発表としては、乳がん治療後の性生活がどの程度下がったかという知見や、アメリカ精神医学会の診断マニュアルであるDSMの第5版が2013年5月に発行されたことを受けて、

性に関するトピックがどう変遷していったかについてのレクチャーも聞いた。後者では、今回新たな名前となったGender Dysphoria（これまでのGender Identity Disorder〔性同一性障害〕に相当するもので、新しいコンセプトが取り入れられている）は、その内容の選定に際して他の疾患と比較しても非常に多くのコメントがあり、睡眠障害に次いで多い数であったという報告が印象深かった。



社会科学的な研究の発表

社会科学の発表では、私が聞いた中では愛情表現の国際比較を行った研究の発表も面白かったが、印象深かったのはSexual right committee symposium（性の権利に関する委員会のシンポジウム）というセッションであった。QOLの向上にむけてこれまでと現在、そしてこれからについての話が展開された。

セクソロジーの本が最初に出たのは1968年のことであり、この時は女性の権利についての内容が多く含まれていたらしい。性の権利に関しての活動も時代とともに変わっており、20世紀前半には「セクシュアリティとfreedom（自由）とLiberty（権利・解放）」という課題をもって始まった権利獲得の運動は、20世紀後半には「セクシュアリティとhealth（健康）」にその焦点が移っていったということ、この数十年、性の権利はWASや国際家族計画協会（IPPF）でその概念が議論され、発達してきたことなどを聞いた。

WASでは今、リプロダクティブとエロティックの二つの側面から性を捉えているという。WASの性の権利に関する委員会の議長の一人であるTommi PaalanenからはSexpo Foundationでフィンランド政府の性の権利のプロモーションのための公式ビデオがつくられたという話を聞くことができた。さら

に、南アフリカの Marlene Wasserman から、彼女の国での性の権利の歴史についても学ぶことができた。女性の人権が国に認められ始めたのは 1995 年、1996 年にはすべての人への差別をなくすという宣言がなされ、それを受けて LGBT の人権が保障されるようになったのは 2006 年だという。南アフリカでは歴史的に性の問題の前にアパルトヘイト問題が根深く存在していることが問題を一層複雑にしてきた。また南アフリカで性の健康というと、権利の話よりも HIV のことが中心になるという現状も知り、「6 時間に 1 人の女性がパートナーに殺される」「2009 年現在、2 人に 1 人の女性がレイプ被害を受ける」という説明には胸が痛くなった。

WAS の性の権利に関する委員会のもう一人の議長である東優子氏からは、日本のトランスジェンダーに関する歴史が語られ、世界の近年の動向を反映せずに現在トランスジェンダーのケアが医学的なアプローチに偏重していることの問題点が指摘されていた。特に若い世代の人たちが、トランスや性的マイノリティのコミュニティにアクセスすることなく医療ベースのサポートに繋がるということが問題視されていた。子どもを型にはめることになってしまう体制の危うさ、手術をしなくてはならないという考えの時代はもう終わったということも質疑の中で話されていた。またパートナー概念の問題点についても触れられていた。

筆者の研究報告と関連研究

3 日目のお昼には本学会のユース部門の活動報告があり、2012 年島根県の松江で開催されたアジア・オセアニア性科学会で企画された、日本の若者の意見を集めようというセッションについても、世界各国の若者の声を収集する活動の一環として紹介された。

私は 2 日目に「Gender Identity Issues」というセッションの中で口頭発表を行った。こちらも朝 8 時半からスタートということで、聴衆はいるのだろ



うかと不安に思ったが、少ないながらもこのテーマに興味をもつ人たちが朝一で集まっていた。私は今回 Female-to-Male トランスジェンダー／トランスセクシュアルのホルモン治療と QOL についての研究報告を行ったが、私の後の発表者が Male-to-Female トランスジェンダー／トランスセクシュアルの QOL について性別適合手術前と後の比較を行っており、女性と QOL に差がないことや、性的機能は低いという報告を聞いた。自分の内容と近いので、結果はもちろん使っていた指標なども比較でき、お互いにセッション後になぜその質問紙を使ったのか、他にどのような指標を使用したかなど聞くことができてとても興味深かった。

一方同じテーマ内でも、その他の発表はまたしても多彩な内容であった。その中の一人は活動家で、LGBT の子どもを対象とした情報提供プログラムの実践の報告を行っていた。月 2 回、全 15 回のプログラムで、子どもはインターネットでリクルートし、LGBT 内のフォビアを生まないために、様々なセクシュアリティの子がミックスされるようグループを構成。トランスジェンダーの子の治療の進み具合も敢えてまちまちであるという。

先に記した性の権利に関するセッションで聞いた、フィンランドでの「ゲイの人にゲイのことだけを伝えればよいのではない」「それは例えばバイの人の居場所のなさにつながる」という発言を思い出して通じるものがあると感じた。フロアからはストレートの子は入れないのかという質問が出、家族は来月から混ざる予定であること、セクシュアルマイノリティでない友だちも今後入れていきたいという目標が話された。

さらに、インドからの参加者は、ヒジューラの人に科学的情報を届けることの必要性和その困難さについての発表を行っていた。例えば方法が悪かったために去勢によってリビドーを失ってしまったり、生殖器を摘出した場合は性ホルモン投与を行わないと、更年期のホルモン欠乏と同様の状態になってしまうことを彼らが知り得なかったりといったことが挙げられた。発表をキャンセルした人がいたのだが、司会を務めていた東優子氏が機転をきかせてくださり余った時間を最後にディスカッションにあてることになった。そのため、個々の発表はこのように一見バラバラであったが、自分の目当ての発表を聞き終わったあとも残ってくれるオーディエンスが多く、最後の質疑は専門の異なる人たちがそれぞれに質問をし、発表者同士でも突っ込むという楽しいものとなった。

さらにその日のお昼に会場内の小さなスタンドで食事をとっていたところ、先ほどセッションで一緒した方と再会。一緒にお昼を食べながら、発表では聞けなかった、会社での性教育を行った話を聞かせていただき、スマートフォンから動画も見せてもらった。アイスブレイキングゲームなどを交えつつ、企業に性について伝えるワークショップを展開する取り組みについてじかに映像を見たり質問したりでき、これもよい出会いであったと思う。

小貫氏の通訳で盛り上がったセッション

最も楽しんだセッションは、『Brazil-Japan session』というプログラムだった。ブラジルで長く研究に携わっていらした東海大学の小貫大輔氏が、ブラジル語と日本語の通訳をしてくださり、お互いの母語で質問しあ



うという国際学会の中ではちょっとめずらしいタイプのセッションであった。日本からの参加者とブラジルからの参加者が10数人ずつ集まって気になったことを「こっちはこうだけどそちらはどう？」と質問しあい、そのトピックに詳しい人が手を挙げて



答えていく。最初はそれぞれの国の流儀で挨拶。最初はブラジル流に距離をぐっと縮めて頬にキスをし合う挨拶を（南部地域ではキスが3回、サンパウロでは1回など地域差があるとのこと）、続いて日本流の少し離れてお辞儀をする挨拶をした（日本の先生から年配の人が顔を上げるまで若手はお辞儀を続けることとアドバイスがあり、日本人の若手が冷や汗をかく一幕もあった）。

まったく違う挨拶を楽しみ距離が縮まったところでフリートークへ。出産の方法や入院の日数、若者のセックス、中高年のセックス、妊娠中のセックス、草食男子、メディアでの性の扱われ方、トランスジェンダーの治療のサポート体制、出生率の低下とその対策など、小貫氏がギブアップされるまで話は途切れることなく続いた。特に興味深かったのは、ブラジルでも若い男性は“男性らしさ”のステレオタイプから近年解放されつつあるということ、それ故に女性との関係が持ちやすくなっているそうだ。また出生率の低下は日本・ブラジル共通であることや、ブラジルの女性はセックスに満足しているというイメージを抱かれやすいがそれは嘘で、気持ちよくならなくてはというプレッシャーはあり、性的に解放されているとは言えないという話も出て驚かされた。

もちろん、データ以外の部分は10数人の意見がその国の真実かはわからない。日本人同士でも意見が異なることもあったが、そういった点も含めブラジルで性科学に携わる人から見た自国の文化、生の声を聞くことができた貴重な経験であった。特定のテーマを設けたり講演を聞いたりするのはまた違った刺激的な時間を過ごすことができたと思う。

参加するスタイル

学会全体を通して感じたのは、最初のサンバに参加者が踊り出す一幕でもそうなのだが「参加する」意識が強いということだった。やはり開催国の地元参加者が多くなるため、会場にはたくさんのブラジルからの参加者がいた。ブラジルは英語が得意でない人が多いというのも現地で過ごしてみても実感で、ホテルやショッピングモールなど、観光客が多く来ると思われる街の施設でも、簡単な単語でも英語が通じる人は少なかった。学会会場ではそれよりは格段に英語でコミュニケーションをしている人が多いが、なかにはまったく英語は分からないという方もいるようだった。一番大きいホールでは同時通訳のイヤホンが貸し出され、ポルトガル語と英語が随時、双方の言語に翻訳されていた。2012年にアジア・オセアニア性科学学会が日本で開催された時も同様の状況で、大ホールでの講演は翻訳がついていたので、このあたりに最初はとても親近感を覚えていた。しかしセッションに参加していくうちに、あの時とは少し状況が違ってくるように思われてきた。

先の日本の学会では、基本的には講演を行う人は英語で、質問する人も英語で話し、日本では翻訳は英語がわからないオーディエンスが内容を受け取るためのものであった。もちろんセッションによっては日本語が使えることもあっただろうが、基本的には英語が喋れる人が意見を出すという雰囲気を私は感じていた。対して本大会では話者も聴者も翻訳機を使ってやり取りをするというスタンスだった。スピーカーもポルトガル語を適宜使用し、会長講演もポルトガル語で行われたし、複数のプレゼンターが登壇するシンポジウムでも英語を使う人とポルトガル語を使う人が半々というものもあった。その場合、ポルトガル語の分からない別のプレゼンターは壇上で翻訳機を使ってトークの内容を理解している。質問者もポルトガル語を使うことに何らためらいはなく、逆にポルトガル語の講演に英語で質問が出ることも多々あった。こうした状況が、少なくとも大ホールでは、全体に活発な議論に繋がっていたように思えた。ここでも、受け取るだけでなく十二分に参加するスタイルが印象に残った。

今後の課題

帰国しこの原稿を書いていた11月、「トランスジェンダー追悼の日」という国際的記念日がおとずれた。いろいろな情報を目にしたが、一番忘れ難いのは2013年に殺されたトランスジェンダーの人たちに関するインターネット上の情報であった。それはブラジルの人によってまとめられた情報であったため、ブラジル国内の当事者の例を中心にまとめられていた。不当に貶められ、迫害され、残虐な方法で命を奪われたという情報は正視するに耐えなかった。

たった2か月前に訪れたブラジル、セクシュアルマイノリティ当事者を含め、性に関する活動家、支援者、研究者、皆が活発に発言していたあの学会を思うと、同じ国内（場合によっては同じ都市）で起こったというこれらの出来事は非常に悲しく、悔しいものであった。我々は、専門家として学会の場で情報を交換し、議論し、自分たちの国にそれを持ち帰る。そしてそれぞれが自助グループの活動や研究など各々のフィールドでそれを活かしていくだろう。それに加えて、いかに専門家でない人たち、性科学や性の健康に特別の興味を持っていない人たち、あるいは誤解や悪感情を持ち身構えている人たちに情報を提供していくか、偏見をなくしそれぞれの性のあり方を認められるように伝えていくか、これは本当に大きな、我々に課せられた課題なのだと、再認識するに至った。

性の権利に関するシンポジウムで聞いて心に残っていた、「性の権利は、LGBTや何らかのピアのためのものだけではない。私たち一人一人のためのものなんだ（sexual rights for us）」という発言を改めてかみしめた次第である。

今回のWASの大会は2015年、シンガポールで開催予定である。またAsia-Oceania Congress of Sexology（アジア・オセアニア性科学学会）が、2014年はオーストラリアで、2016年には韓国で開催される。国際学会の中でも、ブラジルと比較してかなり足を運びやすい場所であると思う。日本からもたくさんの方が「参加」して、「私たちの権利」について考え「伝える」側になる機会が得られたら素敵だと思う。

性教育の歴史を尋ねる

戦後・純潔教育編

茂木輝順

第10回 「性教育」か「純潔教育」か

もてぎ てるのり
女子栄養大学大学院栄養学
研究科保健学専攻博士後期
課程修了、博士（保健学）

前回述べたように、文部省純潔教育委員会（以下、委員会）の「純潔教育基本要項」は1949（昭和24）年1月28日に各都道府県教育委員会あてに通牒され、6月には『純潔教育基本要項（附 性教育のあり方）』として有償頒布されました。

「純潔教育基本要項」は、全体でおよそ3500字の分量で、前文と以下の5節（純潔教育の目標／純潔教育実施の方針／純潔教育をおこなう場所／純潔教育の方法／純潔教育上の諸問題）で構成されています。このうち、「純潔教育の目標」は次のとおりです。

「純潔教育は、単にいわゆる性教育の部面にとどまることなく、同時に一般道徳教育、公民教育、科学教育、芸能文化教育との連関において、およそ、左の点に目標をおき総合的に推進すること。（一）社会の純化をはかり男女間の道徳を確立すること。（二）正しい性科学知識を普及し、性道徳の高揚をはかること。（三）レクリエーションを奨励し、健全な心身の発達と明朗な環境をつくることに努めること。（四）宗教、芸術、その他の文化を通じ、情操の陶冶、趣味の洗練をはかること。」⁽¹⁾

今回、注目したいのは、下線の部分です。「純潔教育の方法」の節にも、「純潔教育の内容中、特に性教育の実施については、左の諸点に留意すること」⁽²⁾とあるように、性教育より純潔教育のほうが広い概念として捉えられていることです。

一方、安藤画一（慶応大学教授）が性教育の小冊子用に執筆した「性教育のあり方」では、「純潔教育とは、純潔の意義とその実行方法とを教えることをいうのであります。したがって純潔教育は性教育の一部—主として性道徳—を教育の対象とするものであります」⁽³⁾と述べられています。つまり、『純潔教育基本要項（附 性教育のあり方）』では、同じ書物のなかで、純潔教育と性教育の位置づけが相反していることになります。

委員の意見集約のために実施したとみられる「純潔教育委員会委員に対する問合せ 回答綴り（1947年10月）」⁽⁴⁾には、誰の回答かわからない無署名の2名を

含めて15名の回答が収録されていますが、その中の「『性教育』と『純潔教育』との関係について」という質問では、回答者15名のうち以下の11名（高島米峰（評論家）、大山正（厚生省社会局福利課長）、久布白落実（婦人運動家）、山室民子（文部省視学官）、久慈直太郎（日本赤十字社産院長）、寺本慧達（千代田高等女学校長）、伊藤秀吉（純潔協会）、千本木通子（婦人運動家）、寺中作雄（文部省社会教育課長）、無署名の2名）が純潔教育のほうが広義である旨を回答しており、対して、性教育のほうが広義である旨を述べているのは「純潔教育は性教育の一部を取扱ふものである」という安藤画一と、「性教育が理想的に実施されるならば、一般純潔教育の目的とするところも容易に実現する」と回答した原文兵衛（内務省警保局公安第二課長）の2名です⁽⁵⁾。委員会では比較的早い段階から“性教育は純潔教育の一部である”という意見が優勢であったとみられます。CIEとの交渉役を担うなど委員会の中心的な人物であった山室民子は、「純潔教育委員会」の名称が「一、二回会合する中に自ら決」まり⁽⁶⁾、「別に大した理由もないが、性教育よりは純潔教育の方が妥当だろうというのでそうなつたと覚えている」⁽⁷⁾と、述べています。

前回、金子貞子（文部省事務官）がNelson（CIE Adult Education Officer）に「委員の中に大きな意見の相違がある」と説明していたことにふれましたが、委員の中で結局埋められなかった隔たりの一つが、「性教育」か「純潔教育」か」という問題だったと考えられます。

【注】

- (1)『純潔教育基本要項（附 性教育のあり方）』印刷局1949年6月p.10 下線は引用者による
- (2) (1)と同書p.15
- (3) (1)と同書pp.23-24
- (4)『性暴力問題資料集成』第1巻 不二出版2004年収録
- (5) なお、残りの2名、花木サチヲと植村益蔵の回答からは、性教育・純潔教育の概念の広狭は判断できませんでした
- (6) 山室民子「純潔教育事始めの記」『社会教育』1973年10月号p.25
- (7) 山室民子「葡萄の葉を保つ—性教育について—」『知識人』1949年5月号p.23

ネッド・ウィークスの訴えたこと

クリスマスの前日 24 日に、英国政府が科学者アラン・チューリングへの死後恩赦を正式決定しました。チューリングは 1912 年ロンドン生まれの天才的な数学者で、第二次大戦中にはドイツの暗号を破って連合国側の勝利に大いに貢献しました。またわずか 24 歳で現在のコンピュータの原型となる所謂「チューリングマシン」の理論を発表し「計算機科学の父」と称される人物です。しかし 1952 年に同性愛行為で有罪判決を受け、約 1 年間の化学的去勢措置を受けた後の 54 年に自宅で青酸中毒で死亡しました。41 歳でした。それは母親を思っの「事故に見える自殺」だといわれています。今回の死後恩赦は、この同性愛行為への有罪判決を取り消す国王大権による例外措置 (Royal Prerogative of Mercy) で、「恩赦」と訳すよりも「慈悲救済」というようなニュアンスがあります。

米国人劇作家ラリー・クレイマーの代表作にエイズを扱った芝居「ノーマル・ハート」(1985 年初演) というのがあります。2011 年にブロードウェイでリバイバル上演されトニー賞も獲得しました。今年最初のこのコラムでは、その主人公ネッド・ウィークスの台詞を紹介します。

この劇の最後に近く、ネッドは歴史上の同性愛者たちの名前を列挙しながらこう訴えるのです。

「オレが生きているこのオレたちの文化には、ブルーストもいた、ヘンリー・ジェイムズもチャイコフスキーもコール・ポーターもいた。プラトンもソクラテスもアリストテレスもアレキサンダー大王も。ミケランジェロ、レオナルド・ダ・ヴィンチ、クリストファー・マーロウ、ウォルト・ホイットマン、ハーマン・メルヴィル、テネシー・ウィリアムズ、バイロン、E・M・フォスター、ロルカにオーデンにフランシス・ベイコン、ジェイムズ・ボールドウィン、精神科医のハリー・スタック・サリヴァンも経済学者のジョン・メイナー

ド・ケインズも国連事務総長だったダグ・ハマーショルドも……彼らは透明人間じゃなかったんだよ。

知ってるかい？ 第二次世界大戦で、アメリカの勝利に最も貢献した男の 1 人はオープンリー・ゲイの英国人だった。彼の名前はアラン・チューリング。彼はドイツの暗号を解読した。彼のおかげで連合国はナチスがどう動くのか前もって知ることができた——そうして戦争が終わり、彼は自殺した。自分がゲイであることに悩んだ果てに。

どうしてこういうことを学校で教えないんだ？ 教えてたらチューリング自身だって自殺しないで済んだかもしれない。きみだって自分のことでそんなに怯えないで済んでるはずだ。本物のプライドを手にする唯一の方法は、オレたちのこの文化がセックスだけじゃないと世間に認めさせることなんだ。すべてがここにある——歴史のすべてにわたってオレたちは存在した。そのことを言葉にしなきゃダメなんだ。誰がそこにいたか言わなきゃ、誰も知らないままなんだ。オレたちが何を考え、何を感じ、この世界にどんな創造的な貢献をしてきたかをはっきりぜんぶ言葉にしなきゃすべて存在しなかったことになってしまうんだ。そしてそうしない限り、オレたちがこの街でこの市でこの州で一つにまとまって透明人間じゃない目に見えるコミュニティを作って反撃しない限り、オレたちは終わってるんだ。オレはそういう人間になりたい。充分に戦った男の 1 人として生きたい。オレたちの象徴はチンボだと思ってる限り、それはオレたちを文字どおり殺し続ける。オレたちみんな、自分たちの殺人犯に成り果てたいってのか？ どうしておまえもオレも、ブルース・ナイルズもネッド・ウィークスも、ゲイはそうじゃない、おまえらの思ってるゲイはオレたちのことじゃないって、新しいゲイの姿を示せなかったんだろう？…… (後略)」

いま欧米の学校ではこのことを教えるようになっていきます。性教育はじつは人権教育なのだと思います。

きたまるゆうじ ニューヨーク在住 (20 年) ジャーナリスト/作家/元・中日新聞 (東京新聞) ニューヨーク支局長。

「ありのままのわたしを生きる」ために



第34回

わたしの選択

土肥いつき

京都の公立高校教員。24時間一人パレード状態のMtFトランスジェンダー。趣味の交流会運営で右往左往する日々を送っている。

「アウティングの根底にあるのは不信感。自分の都合の悪いことを隠し、相手の秘密を暴くことで我が身を守る行為。それに対して、カムアウトは真逆の行為。互いに相手を尊敬し、語りあい聞きあえる関係のこと」。最近「お座敷」の最後に付け加えた言葉です。閑話休題。

第2段階を通った2004年6月、織田さんから「第3段階は希望されていますか？」とたずねられました。その時のわたしの答は「まだわかりません」でした。当時、日常生活で「性器の形」が問題になることはほとんどありませんでした。また、「男性器がないにこしたことはない」と思いながらも、40年間つきあい続けてきた身体なので、「今すぐ切り捨てたい」というわけでもありませんでした。しかし「いつかはSRSをしたい」という思いは捨てきれませんでした。やりたい時にできるようにするためには、とりあえず動くしかありません。12月、織田さんに「SRSに向けて動きはじめたい」と話しました。織田さんの「なぜですか？」に対するその時のわたしの答えは「お風呂とジーンズのはきこなし」でした。他者から見るとつまらない理由かもしれませんが、わたしの中にあるストレスを正直に言葉にすると、このふたつだったのです。

2005年9月、織田さんは第3段階へ向けた意見書を書いてくれました。それを受けて、わたしはJさんと一緒に関西医科大学の形成外科に行きました。SRSの術式やリスク、費用などの説明とともに、SRS以外に咽頭切除ができることを知りました。わたしの心は大きく動きました。実は、わたしののど仏はかなり大きく、なんとなく気になっていました。それに、SRSが200万円ほどかかるのに対して、咽頭切除は30万円程度です。これなら今あるお金でできます。さっそく翌週、再度形成外科に行き、詳しく話を聞き、その場で手術日を決めました。ところが「咽頭切除しようと思う」ということをブログに載せたところ、たくさんさんのトランスの友だちから「やめた方がいい」というメールが来しました。「手術そのものは簡単なもの

だけど、失敗した時は最悪声を失うかもしれない」という経験者からのアドバイスを読んで、目が覚めました。突然「咽頭切除」が目の前にあらわれた時、リスクや効果や満足度、さらに時期的な問題などを考える余裕をなくして、焦って飛びついてしまっていた自分に気がついたのです。その時、そんな自分に気づかせてくれるトランスの友だちがいることに、本当に感謝しました。そして10月、手術をキャンセルしました。

これ以降、SRSについては焦らずゆっくり考えようと思いました。ちょうど適応判定会議がガイドライン第3版に準拠した形にするために開催されていなかったことも幸いしました。2006年8月、わたしは適応判定会議に乗せてもらうよう、織田さんに依頼をしました。その時わたしは次のように言いました。

適応判定会議を通ったからといって、すぐにSRSをするかどうかはわかりません。自分にとっての優先順位を考えて、「今の自分にとって何が一番必要か」という選択を、自分の意思で行いたいんです。適応判定会議を通っていない状態は、「SRSという選択肢」がないということです。その状態は、「SRSしたい」という気持ちを本来の気持ち以上に持たせてしまうことになる気がします。ですから、とりあえず適応判定会議を通った状態で、自分にとって一番大切なものから順位づけをしたいと思います。

2006年10月、適応判定会議は通りました。家に帰って、Jさんとこんな会話をしました。「適応判定会議通ったけど、SRS、どない？」「やったらええやん」「そやけど、やっぱりいざとなるとイヤやろ？」「それはそうかもしれんな」。上の子どもYとはこんな会話でした。「父ちゃん、手術してもかまへんか？」「好きにしたら」「おまえ困らへんか？」「別に。でも、Rと一緒に温泉行ったら、あいつ『お父さん、なんでこっち入るの？』って言いよるで」「そらそやなあ」。

RやY、そしてJさんの気持ち、子どもたちのこれからの教育費などを考えた結果、わたしは「家族を優先して、当面SRSをしない」という選択をしました。

BOOK GUIDE

今月のブックガイド

性犯罪や殺人に向きあう加害者

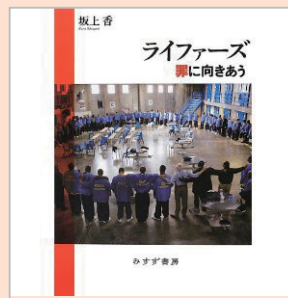
性犯罪やストーカー、ドメスティックバイオレンスを止めるため、国内外で加害者へのはたらきかけに関心が高まっている。驚異的に再犯率を抑える先進例のひとつとして、本書では、米国の民間更正団体“AMITY（アミティ）”が取り上げられている。

アミティとは、ラテン語で友情や友愛の意味だ。安全な場をつくり、罪を犯した者同士が、自らの加害・被害の体験を本音で繰り返し語りあう。自らの過去や罪に向きあい、生き方を変えていく修復的司法である。

著者はドキュメンタリー映像作家で、作品「Lifers ライファーズ 終身刑を超えて」（2004年、パンドラ社）によって、ニューヨーク国際インディペンデント映画祭海外ドキュメンタリー部門の最優秀賞を受賞している。著者とアミティとの運命的な出会いは、著作『魂の殺人—親は子どもに何をしたか』（新曜社）等で知られる、元精神分析医、アリス・ミラーからの紹介だった。

ミラーは、「暴力の世代間連鎖」を問題提起したことで知られる。アミティはその考えを実践に生かし、アリゾナ州を拠点に、犯罪者やさまざまな依存症者の社会復帰を支援する。創設者は、元薬物依存症で元受刑者、かつて「更正不可能」「人間の屑」呼ばわりされていたナヤ・アービーターらである。薬物依存症の回復施設シナノンで学んだ方法を基に創意工夫し、社会復帰施設や刑務所内プログラム、仮釈放者向け施設、通所プログラムなど多彩な治療共同体を運営する。スタッフの多くが犯罪を犯したり、依存症におちいった体験を持つ。

本書は、殺人や強姦など重犯罪で終身刑、もしくは無期刑受刑者となり、刑務所内でアミティの更生プログラムに参加する男性受刑者の活動を中心に追う。取り返しのつかない罪を犯し、長年服役している彼らが、人間的に成長し自己変容を遂げ、相談役などとして、ほ



ライファーズ 罪に向きあう

坂上 香著
みすず書房
2,730円（税込み）

かの受刑者を救う存在になっている。それは本人にとっても、自分は役立つという有用意識が持て、自尊感情を高めている。暴力の悪循環から回復の良循環へ、歯車は回っていく。受刑者の多くが、暴力的で危険な環境で育ち、過酷な被害体験を持つ。マッチョな男性が、一歩先ゆく先輩たちの体験談を聞き、動揺し、トラウマとなっている自己の秘密を語り出す。相次いで開示される性暴力の被害体験。これまで顕在化されていなかっただけで、実は男性の性被害も多いのである。

自分にも他人にも無関心で、人生に投げやりな状態から、人とつながり、自他に関心を持ち、他者への共感を育む。被害を認めることで、初めて加害とも向きあうことができるという言葉は重く、説得力を持つ。

日本にも2007年以降、「島根あさひ社会復帰促進センター」など、官民協働の刑務所が開設され、アミティなどを手本に修復的司法が導入された。刑務作業や職業訓練が主で、受刑者が自由に話すことも許されない日本の従来の刑務所とは異なる刑務所文化の種が、蒔かれた。

修復的司法の最大の壁は、“人は変わり得る”と信じることが、困難なことだろう。人はそんなに簡単には変わるものではないと、一般的に人間の可塑性に不信感がある。さらに犯罪加害者には、烙印や偏見がつきまとう。失望を重ねてきた近親者や専門家のみならず、本人の自己信頼感も乏しいことが多い。本書を読むと、重犯罪者も変わり得るという希望が現実味を帯びてくる。

著者が暴力からの再出発や罪との向きあい方というテーマに強くひかれた一因は、自身が中学の時にリンチに遭い、鬱憤晴らしに家では最も弱者だった弟に暴力を振ったという被害と加害の体験を併せ持つからだという。人は誰でも何かのきっかけで加害者になりうる。法を犯した人たちだけではなく、私たちの問題なのだ。

ナヤは言う。「問題は、監獄から出所するかどうかではない。あなた自身が、内なる監獄から、いかに自由になれるかだ」。（フリーライター／まつばら けい）

▶▶ **2014年2月11日** (火・祝日) 13:00 ~ 16:30 ◀◀

東京性教育研修セミナー 2014 冬 HIV と性の教育セミナー

いつでも、どこでも、だれにでもできる性教育 ～若者たちに伝えたいメッセージ・伝える工夫～

HIV/STI の予防、避妊、デートDV、性の多様性の理解、エトセトラ、性教育の課題は増えるばかり。でも使える時間は少ないし、病気や多様性については「他人事」で終わってしまいそう。そんな声が現場の先生たちからたくさん聞かれます。「性教育の時間はあったけれど内容はあまり覚えていない」大学生の多くがこういいます。

でも、どのテーマでも「自分のことかもしれない」と気づく工夫やヒントがあります。わかりやすくピンときて、どのテーマにも共通する基本メッセージと伝える工夫を考えてみませんか。

内 容 講 話「若者たちに、だれもが伝えられる具体的なメッセージ」池上千寿子（ぶれいす東京）
発 表「新版 Sexual Health Book 開発プロジェクトから」
ー 性の健康と多様性をもりこんだ新教材（Sexual Health Book）の紹介
グループワーク：メッセージを伝える工夫あれこれ

会 場 日本性教育協会セミナー室（東京都文京区小石川2-3-23 春日尚学ビル B1）

参加費・申込み先等 参加費：1,000 円。定 員：30 名（事前登録、先着順）。
申込み先：ぶれいす東京性教育セミナー係 E-mail office@ptokyo.com
対 象：HIV／エイズ及び性教育に関心のある方、保健師、助産師、教師、研究者、大学院生、学生等。
主 催：特定非営利活動法人ぶれいす東京 協 賛：日本性教育協会

2/14 (金)

9:00
}
16:40

第14回九州ブロック性教育研究大会・第18回熊本県性教育研究大会

【テーマ】「子どもたちの様々なニーズに対応する性教育～おとなに考えておいてほしいこと～」

【内 容】講座：「学校における性に関する指導の現状と課題」森 良一（文部科学省学校健康教育課教科調査官）、「昨今の若者と性犯罪～インターネットに起因する性被害・性加害について～」飯塚安博（熊本県警生活安全部少年課肥後っ子サポートセンター長）、「保健室から見える性の諸問題～養護教諭としての対応～」安達里美（日向市立大王谷学園中等部養護教諭）、「発達障がい児の性的問題行動とその対応」水間宗之（九州看護福祉大学准教授）。特別講演及び質疑応答：「セクシャルマイノリティの子どもたちのために～子どもたちにつたえたいこと、大人たちに知ってほしいこと～」ダニエル・C・キャラハン（福岡米国領事館政治経済担当領事）ほか。

【会 場】 くまもと県民交流館パレア（熊本市中央区手取本町 8-9 TEL096-355-4300）

【参加費・問い合わせ先等】 参加費／一般 3,000 円、学生 1,000 円。

問合せ先・申込み先／熊本県性教育研究会事務局 FAX 096-381-7871 E-mail kumaseiken@ina.bbq.jp

2/22 (土)

12:00
}

第24回日本性機能学会東部総会

「女目線の性機能、男目線の性機能」

【会 場】 TKP 品川カンファレンスセンター ANNEX（港区高輪 3-13-1 TAKANAWA COURT 3F）

【問い合わせ先等】 会費：6,000 円（学生 1,000 円） 問い合わせ先：TEL&FAX 048-965-8743 第24回日本性機能学会東部総会事務局（獨協医科大学越谷病院泌尿器科医局内） E-mail 24jssm@e.dokkyomed.ac.jp

「若者の性」白書

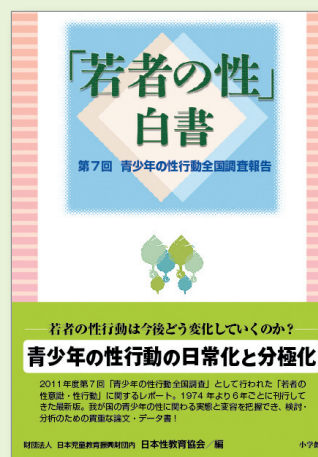
好評
発売中!!

第7回 青少年の性行動全国調査報告

2011年度第7回「青少年の性行動全国調査」として行われた「若者の性意識・性行動」に関するレポート。1974年より6年ごとに刊行してきた最新版。我が国の青少年の性に関わる実態と変容を把握でき、検討・分析のための貴重な論文・データ書！

◆主な内容◆

- 序章 第7回「青少年の性行動全国調査」の概要
- 第1章 青少年の性行動の低年齢化・分極化と性に対する新たな態度
- 第2章 欲望の時代からリスクの時代へ
—性の自己決定をめぐるパラドクス—
- 第3章 青少年の家庭環境と性行動
—家族危機は青少年の性行動を促進するのか—
- 第4章 消極化する高校生・大学生の性行動と結婚意識
- 第5章 青少年にみるカップル関係のイニシアチブと規範意識
- 第6章 高校生・大学生の避妊に関する意識と行動
—避妊行動の分化に着目して—
- 第7章 現代日本の若者の性的被害と恋人からの暴力
- 第8章 自慰経験による女子学生の分化
- 第9章 性情報源として学校の果たす役割
—性知識の伝達という観点から—
- 付表Ⅰ 「青少年の性に関する調査」調査票
- 付表Ⅱ 基礎集計表（学校種別・男女別）



編／財団法人日本児童教育振興財団内
日本性教育協会
発行／小学館

本体2,310円（税込） ● A5判256ページ
全国の書店にてご購入できます！

JASE 性教育・セクソロジーに関する資料室

資料室について

JASE 資料室は国内外の性教育、性科学等に関する文献資料を収集している開架式資料室です。文献資料の数は約5万点以上、現在も日々、増え続けています。性教育、セクソロジーに関する調査、研究のためにご利用いただけます。人間の性に関心がある方、ぜひ足をお運びください。

【閲覧】 必ず事前に電話で予約が必要です（tel 03-6801-9307）。貸出業務は行っておりません。

【開室日・時間】 月～金曜日 10：30～17：30

【休室日】 土・日曜日、祝日、年末年始 ※その他、会議等で臨時に休室することがあります。

【コピーサービス】 コピー料金は用紙サイズにかかわらず1枚10円です。著作権法の許容する範囲で行うものとします。

<http://www.jase.faje.or.jp/pub/archive.html>

資料室 利用方法

収集文献 ・資料

統計・調査報告書、ジェンダー・フェミニズム、性教育一般・性教育の歴史的資料、国内雑誌、障害者、セクソロジー（自然科学系、人文・社会学系）、民俗学・文化人類学・風俗、性研究史・性学史、教科書・指導書・学習指導要領、幼児期～青年期、国内学術誌、国際（海外団体資料・海外学術誌）、高齢者・家族問題、文学・評論・エッセイ・文庫・新書、官公庁資料、JASE 刊行物、映像資料、個人論文、雑誌記事、新聞記事、絵本・写真集・マンガ、江幡・篠崎・朝山・石川・ダイヤモンド文庫、ほか。

<http://www3.jase.faje.or.jp/cgi-bin/search1.cgi>